

【研究論文】

複合動詞の日中対照研究と中国人学習者に対する教授法への課題 ——日本語学習者への意識・習得調査をもとに——

郭 恬

1. はじめに

日本語の中には、複合動詞が多く存在している。森田（1991）が、『例解国語辞典』を調査した結果によると、収録語の11.4%強が動詞で、そのうちの39.29%が複合動詞であるという。実際に、評論、専門書等の知的水準が高く堅い文章から、報道、広告、手紙、日常的な文や会話、俗語に至るまでそれは幅広く用いられている。つまり、日本人は多くの複合動詞を、日常に使っている。

日本語複合動詞の研究も、多角的に進められている。まず複合動詞研究の前段階として、多様な結合様式を有する複合動詞を分類しようとする研究が、動詞の自立語・付属語という観点から複合動詞を分類した寺村（1969）の研究から始まった。この流れは山本（1984）に受け継がれ、前項動詞と後項動詞の格支配のメカニズムへの着目により、分類の指標が考察された。一方、影山（1993）は生成文法の立場から複合動詞の「派生過程の違い」に着目し、意味的結合制限により明確な分類基準を確立した。また、姫野（1999）では複合動詞全般の意味分析がなされており、複雑な多義的意味を整理するとともに、類義語との意味的な差異を明らかにしている。しかし、日本語教育との関連においては、研究はまだ不十分であると言わなければならない。

非母国語話者の日本語学習者にとって、複合動詞の習得はとても難しい問題である。森田（1978）は「学習者が日本語を学ぶ場合、教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞である。学習者は個々の単純動詞の意味・用法には習熟するが、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない。したがって、複合動詞に関する知識が不十分なまま上級段階に進んでしまい、夥しい複合動詞の波にぶつかって

困惑することになる。」と述べ、複合動詞の習得の難しさを指摘している。また、松田文子（2002）は「複合動詞は日本語を豊かにするものではあるけれども使わなくても意味が通じることが多いため、学習者は使用を回避してしまう傾向が強く、習得が進みにくい」と述べている。現在の日本語教材の開発、または教育現場の実際状況から見ると、大きく立ち遅れていることは確かである。日本語を第二言語として習得しようとする人たちのための教科書には、単純動詞の意味や用法はあるが、複合動詞は、中級のものにもあまり記載されていない。

中国で行われている日本語教育にも同じ問題がある。初心者向けの教材はもちろん、日本語を専門としている大学生や中、上級者向けの日本語教科書や問題集や参考書などさえ、複合動詞についての説明はほとんどない。従って、中国で日本語を勉強している学習者たちは、複合動詞に関する日本語力はあまり持っていないと言える。しかも、この事実はあまり認識されていない。

そこで、中国で日本語教育を受けてきた学習者たちが、実際に日本に留学しに来て、生活の中で日本語を使用する時、大学、大学院で勉強する時、あるいは仕事のため実際に使用する時、日本語の中で使用頻度の高い複合動詞に関する日本語力を持っていないため、支障が生ずる。特に、この問題は上級者、あるいは留学生にしか発生しないため、参考できる辞書、参考書が少なく、学習者にとってかなり難しい問題点である。

中国語の中にも、複合動詞は数多く存在している。日本語と中国語の複合動詞は意味的、統語的な共通点はあるが、一対一で対応するというわけではない。中国人学習者は複合動詞に対して、どのように理解しているか、どのような点が困難だと感じているかを解明するため、日本語の複合動詞と中国語の複合動詞の異同を明らかにし、そして中国人学習者にとって理解しやすい説明を探らなければならない。そこで本研究では、複合動詞指導を目指す第一歩として、日中複合動詞の共通点と相違点はいかなるものか、学習者の習得状況はどのようなものか、また習得の困難点は何かについて明らかにした。加えて、第二言語習得研究の立場から、中国人日本語学習者への説明を念頭において、複合動詞の指導法への課題について検討した。

2. 研究の概要

本研究では、上記のような目的を達成するために以下の方法によって研究を進めた。

- (1) 第1章では、文献研究として、日本語複合動詞と中国語複合動詞における先行研究を整理し、紹介した。
- (2) 第2章では、日本語と中国語における複合動詞の意味的、統語的な共通点と相違点を分析し、両者の異同による学習の問題点を探った。また、それを受け、中国人学習者への説明を念頭において、学習者にとって理解しやすい複合動詞の分類法を考案した。
- (3) 第3章では、中国人学習者の日本語複合動詞に対する意識と習得の実態を明らかにするために、約100名の中国人学習者にアンケート調査を行った。
 - ① アンケート調査の第一部分では、中国人学習者は日本語複合動詞について、どのような意識を持っているのか、教師・教材・教授法についてどんな困惑・感想・意見を持っているのかを調査した。
 - ② アンケート調査の第二部分では、穴埋めテストにより、中国人学習者が日本語複合動詞の意味と用法をどのぐらい理解しているか、どのぐらい運用できているのか、学習の実態を調査した。
 - ③ アンケートで集められた誤用例について分析を行い、中国人学習者にとって習得しやすい複合動詞と習得しにくい複合動詞を整理し、誤用が出る原因とそれを防ぐ方法を検討した。
- (4) 第4章では、第2章、第3章で明らかにした問題点から、日本語複合動詞の学習の盲点を探り、日本語テキスト、教授法に存在している問題点を分析し、筆者が提案した分類法の教育現場に導入する可能性を検討した。

3. 研究の実際

3.1 複合動詞の概念と日中複合動詞の代表的な分類法

本研究の第1章では、先行研究を参考し、複合動詞の概念と日中複合動詞の代表的な分類法を整理し、以下のようにまとめた。

●複合動詞の定義：複合動詞の定義については、定説がないようである。広く認められている見方は広義的定義と狭義的定義と二分される。動詞に動詞連用形、助動詞、補助動詞、形容動詞、名詞など他の要素が各々結合したものの全体を指す広義の場合もあるが、日本語学の学界では、狭義の複合動詞、すなわち「V+V」型を研究対象として取り扱うことが多い。本研究では、動詞連用形+動詞の型のみを扱い、それを複合動詞、またはCVと呼ぶこととした。

●日本語複合動詞の代表的な分類法：

日本語複合動詞の分類		
寺村分類（意味の独立性から見る複合動詞の分類）	I 自立V+自立V	例：持ち上げる、走り去る
	II 自立V+付属V	例：見上げる、走りこむ
	III 付属V+自立V	例：差しかかる、取り押さえる
	IV 付属V+付属V	例：取り成す、のり出す
山本分類（格支配から見る複合動詞の分類）	I類 (V1-V2)	例：持ち歩く
	II類 (V1-v2)	例：見直す
	III類 (v1-V2)	例：打ち重なる
	IV類 (v1-v2)	例：取り組む
劉艶萍分類（前項動詞と後項動詞の意味関係から見る複合動詞の分類）	(1) 修飾被修飾関係	例：押し潰す、調べ直す、
	(2) 因果関係	例：知り悩む、降り積もる、
	(3) 対等関係	例：泣き叫ぶ、行き返る
	(4) 添意関係	例：打ち見る、歩き始める
	(5) 転意関係	例：痛み入る
中村分類（言語認知の立場から見る複合動詞の分類）	(1) アスペクト CV	例：読み始める、取り終える
	(2) 主補 CV	例：すくみ上がる、殺し合う
	(3) 主主 CV	例：嘆き悲しむ、売り歩く
	(4) 補補 CV	例：落ち着く
	(5) 補主 CV	例：打ち続く、立ち遅れた
影山分類	A類： 語彙的複合動詞	例：飲み歩く
	B類： 統語的複合動詞	例：飲み始める

●中国語複合動詞の代表的な分類法：

中国語複合動詞の分類（戴浩一分類）

並列式複合動詞		例：①喜欢（好き）②议论（討論する）③ 买卖（売買する）④呼吸（呼吸する）
偏正式（修飾-述語型）複合動詞		例：①改做（作り直す）②加买（買い足す） ③代订（代わりに注文する）
動補式 複合動 詞	a 結果複合動詞	例：打破（叩き壊した）
	b 方向複合動詞	例：跑出来（走って出てくる）
	c 時相複合動詞	例：用完（使い終わる）

3.2 新しい分類法の提案

第2章では、日本語と中国語における複合動詞の意味的、統語的な共通点と相違点を分析し、両者の異同による学習の問題点を探った。また、それを受け、判断しやすい特徴、中国語との対応、学習者の実際などいくつかの要素を配慮し、実用的な分類法を以下のように提案した。

並列関係複合動詞 (V1=V2型)		鳴り響く、泣き叫ぶ、照り輝く、折り曲げる、褒め称える、光り輝く
熟語複合動詞 (v1-v2型)		落ち着く、落ち込む、取り組む、取り扱う
アスペクト複合動詞 (V1-アスペクト型)		読み始める、降り続く、使い切る、食べ過ぎる
補助関係複合動詞	主補 (V1-v2型)	やりぬく、疲れ果てる、歌い上げる、問い詰める
	主主 (V1-V2型)	食べ歩く、撃ち殺す、売り歩く、聞き飽きる
	補主 (v1-V2型)	差し替える、引き続く、引き戻す、取り消す

3.3 日本語複合動詞に関する意識・習得調査

(1) 調査の概要

日本語の複合動詞について中国人学習者はどのような意識を持っているのか、どの程度習得しているのか、どのような誤用がよく出るのかまたその原因は何かを明らかにするために、中国人学習者にアンケート調査を実施した。アンケート内容は二つに大別した形で構成した。第一部分は日本語の複合動詞に関する中国人学習者の意識と習得の自己評価についての質問である（以下「意識調査」と呼ぶ）。第二部分は文中の下線部の中国語

を日本語の複合動詞に訳す 15 個の問題（以下は「中訳日問題」と文中の下線部の日本語の複合動詞を中国語に訳す 15 個の問題（以下は「日訳中問題」）となり、計 30 問である。設問の作成において、文例の難易レベルについては、日本語能力の中級程度で理解できるような語彙及び文型を選んで作成した。複合動詞を選ぶ基準については、まず日本語複合動詞の分類法を参考し、様々な結合様式と意味構造を持っている複合動詞を極力網羅するように注意を払った。また、『複合動詞資料集』の前・後接率順構成要素表を参考し、使用頻度が高く、造語力の強い構成要素を選ぶことにした。

(2) 調査結果と考察

第 1 項の意識調査の調査結果から、「複合動詞」という概念は中・上級学習者に広く知られていると見られる。学習者は指導者の指導、教科書など、どこかでこの概念に触れたことがあると考えられる。しかし、複合動詞について、学習者たちは表面的にしか接していないと言えるだろう。また、複合動詞についての説明は理解できたかの質問について、「だいたい理解できた」（43.1%）が最も多い一方、実際に使うかどうかと、コミュニケーションがうまくできると思うかどうかについて、「たまに使う」（50%）と「できるが、不便を感じる」（53.4%）が最も多くなっている。すなわち、日本語複合動詞の習得について、学習者の自己評価と実際の使用能力との間に、学習者が気付いていないギャップが存在している。学習年数の少ない学習者の間で、この問題は特に顕著である。

第 2 項の「中訳日問題」の平均正解率は 46.66%であり、半数を下回っている。全体的に、以下の三つの傾向が見られた：①アスペクト複合動詞が圧倒的に上位を占めている。②結果複合動詞の正解率が下位となっている。③熟語複合動詞の正解率は両極端になっている。

第 3 項の「日訳中問題」の平均正解率は 63.88%であり、「中訳日問題」の 46.66%より 20%ぐらい上回っている。全体的に以下の三つの傾向が見られた：①前項動詞と後項動詞の意味が変化がない複合動詞が圧倒的に上位を占めている。②V1-v2 型複合動詞の正解率が下位となっている。③熟語複合動詞の正解率は両極端になっている。

(3) 中国人学習者における日本語複合動詞の誤用分析

全般的に見ると、誤用の原因と考えられるのは以下のようなことである。

- ① 前項動詞と後項動詞の片方だけを使う。また、複合動詞の使用を回避するため、意味の近いフレーズや短い文などで代用する。
- 例： 考え直す→考える、 押し倒す→推す、押す、倒す
 言い過ぎる→言うのがひどい。 落ち着く→心配しないで。
- ② 「前項動詞の連用形+後項動詞」という接続の法則を把握していないため、接続の誤りが多い。
- 例： 歩き疲れる→歩いて疲れる、歩く疲れる、あるきづかれる
- ③ 自動詞と他動詞の混同による誤用が多い。
- 例： 焼け死ぬ→焼き死ぬ、 撃ち殺す→打ち死ぬ
- ④ 前項動詞あるいは後項動詞を類義語に置き換え、存在しない造語を作り出す。
- 例： 助け合う→手伝い合う、お互い助ける、飲み込む→食べ込む
- ⑤ 中国語を直訳し、存在しない語を作り出す。
- 例： 取り消し→取消する、 泣き出す→泣き起きる

4. 調査から見た複合動詞の学習に関する問題及び教授法への課題

まず、複合動詞の指導についての意識に、大きな問題点がある。複合動詞の研究は今までは基本的に語彙論や文法論的な立場からアプローチしたものが殆どであり、外国語との対照研究はまだ少なく、外国語教育の分野での研究は特に不十分である。中国国内では、日本語複合動詞に関する研究はまだ初歩的な段階に留まっていると言っても過言ではない。教科書によって与えられる動詞のほとんどは単純動詞であり、教師も複合動詞を新出単語としてしか扱わなく、系統立てて説明することは殆どない。現在の日本語教育における複合動詞の指導に関する意識は、もう学習者の学習意欲、学習者が感じている重要性に追いつかない状態である。日本語複合動詞の学習を充実させるためには、教材改革と学習項目の見直し、それに複合動詞の学習項目の導入方法など、研究を要する課題がとても多い。したがって、複合動詞の習得を検討する前に、まず日本語教育における複合動詞の位置づけを見直さなければならない。

また、複合動詞の習得についての意識にも大きな問題点がある。意識・習得調査の結果から、学習者の自己評価と習得状況のズレ、また複合動詞

における「理解」と「運用」のズレが存在していることが明らかになった。複合動詞は日本語を豊かにするものではあるけれども、使わなくても意味が通じることが多いため、学習者は使用を回避してしまう傾向が強く、習得が進みにくい。加えて、多くの複合動詞は前項動詞と後項動詞によって全体の意味をだいたい推測することができるので、インプットの時は特に難しく感じられない。したがって、多くの中国人学習者は、初めて見る複合動詞と出会う時、漢字を見れば意味がおおよそ推測できると思い込みがちであるため、新出単語としてしっかり記憶しようとしにくいことが多い。その結果、正確な記憶ができていないため、二つの事象を表したい時に、複合動詞の使用を回避し、意味の近い単純動詞を使用する。故に表現が単調で幼くなってしまう、表したい事象を思い通りに表現できない。よって、複合動詞の教授に当たっては、まず、「理解」と「使用」のギャップを意識しなければならない。読む、聞くことができるだけで満足するのではなく、「ごまかし」の利かないアウトプットの行為——話す、書くなどの産出行動ができるまで、しっかり習得しなければならない。

さらに、教科書の説明が不十分である。大学で採用されている日本語教材では、テキストの本文中に出てくる複合動詞は新出単語として扱われるが、そのほとんどは対応する中国語の紹介のみである。文法項目として複合動詞は導入されておらず、テキスト中に現れない語については関連語の補習の機会が与えられないため、複合動詞の体系的な学習は期待できないと思われる。教室でのインプットしか受けられない中国国内の学習者にとって、複合動詞を詳細かつ系統的に説明する教科書や参考書を作成することが必要である。また、教室で意識的に視聴教材を使い、学習者に生の実例に大量に触れさせることも重要である。

それでは、筆者が提案した分類法を日本語教育の現場に導入することは可能だろうか。実際に応用できるかどうかを判断するには、まず、その分類法を直接学習支援ツールとして教材に取り入れることができるかどうか、そして、有限の学習期間の中で、複合動詞の習得に利用できる時間内に確実に習得させることができるかどうかを考えなければならない。

まず、筆者の分類法には、「語彙的複合動詞」、「統語的複合動詞」、「格支配」などの言語学的な難しい概念を避け、中国人学習者にとって掴みやすい概念を使用している。したがって、その分類法を教育現場に導入

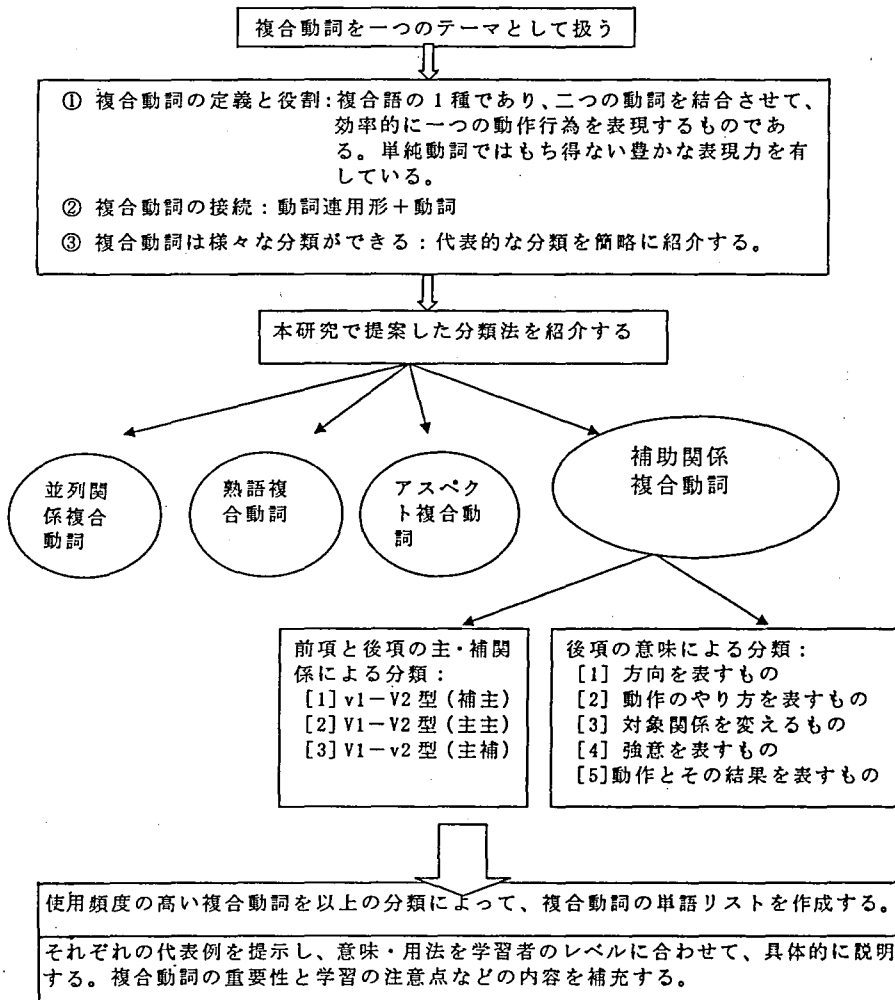
する時、複合動詞の概念に関する基礎学習が比較的簡単である。また、「補助関係複合動詞」以外の三つのグループは、全て複合動詞の中で比較的に特殊なものであり、特徴が顕著である。複合動詞を指導する際に、まず、「並列関係複合動詞」、「熟語複合動詞」、「アスペクト複合動詞」を抽出して説明すると、学習者にとっては理解・記憶しやすく、指導者としても、短い指導時間で順調に進められると思われる。残りの「補助関係複合動詞」は、結合様式と意味関係が最も複雑であるため、学習の順番として最後にすることが望ましい。最も複雑な補助関係複合動詞をどの程度説明するかは、学習者のレベルと複合動詞に使用できる学習時間を考慮しながら、指導者が判断しなければならない。実際にどのように新しい分類法を教育現場に導入するかについて、筆者は流れ図を試み、次のページに提示した。

5. 今後の発展と課題

日本語複合動詞の研究は日本語教育の分野では、まだ未開拓の領域であり、研究はまだ不十分である。外国人学習者にとって学習が難しいと指摘されている複合動詞を効率的に指導するためには、その基礎研究としてさまざまな角度からの研究が求められる。複合動詞を含む語彙習得においては、学習者母語の影響が根強く残るとされる。したがって、効果的な複合動詞指導のためには学習者母語との対照比較は不可欠である。本稿では、日中複合動詞の対照研究を行い、中国人学習者の意識・習得の実態を調査し、第二言語学習研究の立場から、中国人学習者にとって理解しやすい日本語複合動詞の分類法を提案したが、研究の焦点が対照研究と実態調査に置かれたため、教授法への提案を系統的に立てることができなかった。この点は今後の大きな課題となる。また、中国人学習者に対する日本語複合動詞教育の方向を解明し、今後の教材編集に実際のデータを提供するため、対照研究とともに、総合的な「中国語・日本語複合動詞データベース」を構築することが望ましい。また、複合動詞の意味習得における母語の影響を探るという方向の対照研究も必要である。そして、教育現場の教師と連携し、現場での指導経験を活かし、複合動詞に関する基礎研究を積極的に

実践に結びつき、効率的な指導法を体系的に考案することやテキストを開発することも、これからの重要な課題である。

<流れ図>新しい分類法を教育現場に導入する方法



【引用・参考文献】

- 関一雄 (1977) 『国語複合動詞の研究』笠間書院
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語14』早稲田大学語学教育研究所 p. 69-86
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 山本清隆 (1984) 「複合語の構造とシンタクス」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』5 情報処理振興事業協会 p. 317
- 望月圭子 (1990) 「日・中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』
- 林大 (1990) 『日本語教育ハンドブック』日本語教育学会編
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 刘艳萍 (1995) 「试论日语复合动词形成的制约条件」『天津外国语学院学报』
- 長嶋善郎 (1997) 「複合動詞の構造」『語構成』ひつじ書房
- 中村その子 (1998) 「日本語複合動詞の意味形成と特性——言語認知の立場から」
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子 (2001) 「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』」の認知意味論的説明」『日本語教育』111号, 日本語教育学会
- 劉月華等 (2001) 『实用現代漢語語法』商務出版社
- 松田文子 (2002) 「複合動詞研究の概観とその展望——日本語教育の視点からの考察一」『言語文化と日本語教育』5月特集号 p. 170~184
- 田中衛子 (2003) 「類義複合動詞の用法一考——日本語教育の視点から」
- 横山紀子 (2004) 「語の意味の習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割」『日本語国際センター紀要』11. p. 1~12
- 陳曦 (2004) 「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—「～あう」と「～こむ」の理解に基づいて—」『ことばの科学』17、p. 59~80
- (2007) 「日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起—中国西安外国語大学における「～あう」と「～こむ」の調査を中心に—」『ことばの科学』17、p. 59~80
- 张予娜、邓超群 (2005) 「日汉V-V复合动词的异同」《湖南大学学报》
- 戴浩一 (2006) 「中国語の結果複合動詞をめぐる三つの視点」
- 張威 (2007) 「現代日本語複合動詞に関わるデータベースの構築とその応用研究」『人文社会学・社会理工学最前線の課題と大学教育』(東京工業大学) 2007. 2.

(かく てん 信州大学教育学研究科修士課程)